

老舎：職業作家への道

斎藤，匡史
山口大学教養部講師

<https://doi.org/10.15017/9686>

出版情報：中国文学論集. 22, pp.85-102, 1993-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

老舎

職業作家への道

斎藤匡史

老舎は一九三〇年二月末、新加坡を離れ、三月、上海に帰着した。新加坡では、二九年秋、中華書局の紹介で華僑中学（現在の南洋華僑中学）で国文教師を半年間ほど勤めた。三〇年二月、学期が終了し辞職したが、帰国予定を変え、南洋開拓に汗した中国人に興味を抱き、辞職後も他に職を得てこの地に滞りたいと願った。しかし、その職をめぐる第三者との間に不愉快な出来事があったらしく帰国を決意したのであった。¹⁾

上海到着後、鄭振鐸の家に逗留し長篇『小坡的生日』の残り二万字を書き上げ、四月、北平に戻る。

北平では友人白淦洲（当時北平師範学校教務長）宅に仮寓し、基督教青年会、北平師範大学等で講演を行なうなど、すでに世間は彼を「幽默作家」として遇し始めていた。勿論この時已に三作の長篇小説が『小説月報』の連載を終え単行本としても出版されていたのであるから「作家」と呼ばれても不思議はないが、自他ともに認める「作家」となるには道は決して平坦ではなかった。

三〇年七月、老舎は齊魯大学文学院教授兼国文学研究所文学系主任として迎えられ済南に赴任する。この夏、蒋介石は馮玉祥、閻錫山討伐令を下し所謂「中原大戦」が繰り広げられ、秋には蒋介石が勝利し、華北一帯に再び平穩が戻るといふ時節であった。

齊魯大学の前身は、一八六四年、米国長老会が山東登州に設立した「広文会館」と一八六六年に英国浸礼会が青

老舎（斎藤）

州（益都）に設立した「広文書院」が合併して設置された「広文学堂」（濰県）であり、さらに一九一七年、済南医学院、青州神学院を吸収し、私立齊魯大学として発足した教会系大学であった。当時、華北最大の校園と称され、環境が良く、大学運営経費も充分で待遇も良く給料の遅欠配もなかったという（三一年秋、国立青島大学では給料の遅配があり、一ヵ月余り教員ストが続いた⁽³⁾）。また、教会という後盾により省政府等の干渉も比較的少なかったと言われる。老舎着任当時、校長は中央教育官僚を歴任した朱経農（教育学）、学院長は林済青（のち校長、一九三六年、山東大学校長へ転任）であった。

老舎が齊大に職を得た理由を胡金銓は次のように言う。

彼（朱経農）は王雲五と関係が深く、商務印書館の編輯所所長をつとめたこともあった。老舎ははじめのころの何篇かの小説は編輯所編集の『小説月報』に発表しているから、彼が齊魯へ行ったのも、恐らくこの関係からではないか⁽⁴⁾。

この点について確証はないが、この選択が次善の策であったことが、帰国後北平に戻ってから職業作家としてやって行きたかった⁽⁵⁾、と言う老舎の言葉に表われている。

三〇年当時、同人でない商業ベースの文学誌は無かったし、その当時の文壇で老舎自身に明確な文学的主張があったとも言えない。ましてや名が世に出たばかりの彼が頼れたのは、鄭振鐸と『小説月報』しか無かった。それでも創作を続ける環境がほしいとなれば、職業選択肢はいくつも無い。察するに老舎の心情としては、北平から離れたくなかったはずであるが、創作時間を確保することを考えれば、たとえ済南であろうと大学に職を探さざるを得なかったのである。

齊魯大学では「小説作法」、「文学概論」等を担当し、また『齊大月刊』編輯部主任を兼任し自らも辞職する三四年夏まで、文九篇、詩五篇、翻訳十一篇、論文三篇、短編小説二篇をこれに発表している。また「作家」としては、三四年夏までに、長篇小説四篇（『大明湖』は上海事变で原稿焼失、『牛天賜傳』は三四年八月脱稿、九月より『論語』誌に連載）をはじめ、短篇小説、散文、雑文、詩等八〇余篇を十数種の刊行物に意欲的に発表した。

三四年六月末、教師生活に終止符を打ち、筆一本で生きる決意をし、七月中旬、齊魯大学を辞して、八月十九日、

文壇の中心——上海へ向った。

八月跑到上海、我不是去逛、而是想看看、能不能不再教書而專以寫作掙飯喫。我早就想不再教書。在上海住了十幾天、我心中涼下去、雖然天是那麽熱。爲甚麼涼？兜底兒一句話：專仗着寫東西喫不上飯。（八月上海まで行ったが見物ではなく、教員をやらずに物を書くだけで暮らしてゆけるかどうか見たかったのだ。上海に十数日滞在し、私の胸中は寒々として来た。気候はひどく熱いのにごうして寒々としたか。つまり一言で言うなら、物を書くだけでは食べて行けないということが分かったからだ。）

この時、老舎は已に胡潔青との間に一女（舒濟）を設け、北平の実母も養わねばならぬ立場にあつた。経済的に安定した教授の職を辞して（当時の大学教員は招聘制で任期は一年であつたが、「辞職」は引き続き招聘を受けなという意志表示だといえる）上海の文壇、出版界の状況を下見聞に行つた訳で、そこに「職業作家」転身への並々ならぬ願望が伺えよう。この年の『東方雜誌』一月号に已にその心情が見える。

希望能在暑後不再教書、而專心寫文章、這簡是不容易實現的。自己的負擔太重、而寫文章的收入又太薄：我是不能不管老母的、雖然知道創作的要緊。（夏以降もう教鞭は取らずに文章を書くことに専念できたらと思うが、これはそう簡単には行かない。自分の負担は重くなるが、物書きの収入はあまりにも少ない。創作の大切なことは分かつていても老母をやり放す訳にはいかない。）

だが、二ヵ月足らずの南方見聞の結果は、老舎を再び教壇に戻させることになり、三四年初秋、山東大学文理学院の招聘を受け青島に赴いたが、早くも十二月には趙景深への返信（趙は雜誌『青年界』の編集者で、老舎に長篇小説の依頼の手紙を送つた）で次のように言っている。

假如明年秋間能離開學校、那便好辦了。我很希望不再教書。自然從經濟上看、我現在還不敢說我能專靠寫文章喫飯、……（もし明年秋に學校を離れられたら、それへ長篇執筆）はできる。もう教員はやりたくない。勿論經濟的に見れば、いまだ物を書くだけで生活して行けるとは言えないが……）

教師をやめることによる経済的な困難は重重承知の事である。にもかかわらず齊大を辞職してまで行動に出ている点理解に苦しむ。それは老舎自身が事更「寫文章的收入太薄（物書きの収入はあまりにも少ない）」などと職

業作家となる最大の障害を収入面の不安にあるように言う一方で、九月に得た山東大学の職を早くも十二月には辞める算段をしている事にも当てはまる。更に注目すべきは、「専仗着寫東西喫不上飯（物を書くだけでは食べていけない）」の真意が一体何なのか、どういう状況を目睹しその結論を引き出したのか再考の余地がある。老舎の上海行きについて『老舎評傳』は次のように記している。

上海は已に老舎の想像していた姿ではなく、まったくの「不景氣」であった。国民党反動派のファッショ的文化独裁主義の影が文芸界をおおい、反革命の文化「包圍」が一切の人民文芸の生存の望みを打ち砕いた。老舎が上海に至る前年、つまり一九三三年十月、十一月、上海良友圖書公司、神州国光社などの書店や上海芸華電影公司がたたき壊された。また、彼が上海を離れてから数ヵ月後の一九三四年十一月、『申報月刊』が抗日言論を掲載したとして、国民党特務が滬杭公路で『申報』の責任者である史量才を暗殺した。老舎は上海を見て「物を書くだけでは食べていけない」ことをはつきりと感じとった。

これを素直に読めば、対内的には南京政府の反共政策、対外的には日本の侵略攻勢という社会情勢の中、当局の言論弾圧が強化され、文芸界、出版界の先行き不安により「職業作家」では方便の立たないことを実感したと言えるが、果してそうであったのか、また、老舎の胸中は如何なるものであったか考えたい。

二

老舎の山東七年間の足跡を見ると、

○ 30年7月～34年7月中旬 齊魯大学教授（濟南、四年）

・ 34年8月19日～9月上旬 上海・南京（約一ヵ月）

○ 34年9月～36年7月中旬 山東大学教授（青島、一年十ヵ月）

・ 36年7月～37年8月13日 青島にて文筆生活（約一年一ヵ月）

○ 37年8月13日～11月15日 上海行きを断念し、齊魯大学教授（約三ヵ月）

・37年11月15日 臨時首都漢口へ向う

ここではまず、老舎の言うところの職業作家一本では経済的に成り立たないという点について見てみる。

大学を辞しての決断には当然、それなりの収入を得る成算がなければならぬはずである。彼が規準とする「職業作家」の収入については次の言葉から分かる。

在七七抗戦那一年的前半年、我同時寫兩篇長篇小説。這兩篇是兩家刊物的「長篇連載」特約稿，約定：每月各登萬字，稿酬拾元千字。這樣我每月就能有二百元的固定收入，可以作職業作家矣。(七七抗戦の年の前半、私は同時に二篇の長篇小説を書いてゐた。この二篇は二つの雑誌の「長篇連載」特約原稿で、毎月おのおの一万字を載せ、稿酬は千字十元と決められていた。こうして私は毎月二百元の固定収入を得ることになり、職業作家たり得た。)

実際にはこの計画は日中戦争の勃発により頓挫し、已に書き上げた各々三万字余りの原稿は散佚した(『病夫』と『小人物自述』、後者は三七年八月一日刊『方舟』誌第三九期に四章分一万五千字が掲載された)。月二百元を「職業作家」の規準にしていたと考えてよい。これは三六年七月から約一年一ヵ月、青島で作家として暮らしていた時のことである。

在戰前、當我一面教書一面寫作的時候、每年必利用暑假暇寫出十幾萬字；當我辭去教職而專心創作的時候、我一年(只有一年是這樣的作職業的寫家)可以寫三十萬字。(戰前、教えながら物を書いてゐたころ、毎年必ず夏休み正月休みを利用し十数万字書いた。教職を辞して創作にうち込んだ時、一年へたった一年だけの職業作家であつた)に三十万字は書けた。)

つまりこの時期に三十万字(うち「駱駝祥子」十五万七千字)を書いたのであるから「千字十元」として、三千元の稿料収入があり、月に単純平均して二百三十元になったことになる。他にこの時期に出版された単行本は『蛤藻集』(三六年十一月、開明書店)、『老牛破車』(三七年四月、人間書屋)がある。また、短篇集『趕集』の第三刷が三六年四月に出ている。印税収入をこの短篇集に例をとり計算してみる。『趕集』は良友圖書印刷会社が「良友文学叢書」第十一種として、三四年九月に初版三千部で出版、三五年に第二刷を二千部、先の三刷を二千部出し

た。叢書は一律定価〇・九元で、印税は十五パーセント（ふつう十〜十五パーセント、魯迅は各書店別格扱いで二〇パーセントであったという）、慣例として二百元余りを印税先払いとして作家に支払い喜ばれたと言う。これに従って計算すれば、三四年が先払い分を加えて約四百元、三五年、三六年が各々二百七十元で合計約九百元が『趕集』の印税収入となる（所得税は民国二十五年〜三六年）から徴税が始まったが、ここでは考えない。また、版權買取り方式もあり、千字五〜十元あるいはそれ以上）。

『蛤藻集』は四七年までに五刷、『老牛破車』は四一年一月までに三刷と版を重ねている。定価と部数の具体的数字は未確認であるが、初版の印税も少くない事が察せられる。

三四年八月の上海行きは「月二百元」の収入見込みがあつたのか、三四年八月までの一年間の原稿料から考えてみる。

老舎の言う「千字十元」は、三六、三七年当時のもので、三三、三四年頃はこれより単価が低いはずである。

戦前、我自已能賣到拾元或八元一千字。⁽¹³⁾（戦前、私は千字十元あるいは八元で売ることができた。）
この「戦前」は三〇年代全般を指すものではない。別の言葉を引くと、

材料受了損失、而藝術佔了便宜；五千字也許十萬字更好。文藝併非肥猪，塊兒越大越好。不過呢，十萬字可以得到三五百元，而這五千字只得了十九塊錢，這恐怕就是不敢老和藝術親熱的原因吧。⁽¹⁴⁾（素材は損失を蒙ったが、芸術では得をした。五千字は十萬字より良いのかも知れない。文芸は肥えた豚じゃないから大きければ良いといふものではない。けれど十萬字は四、五百元になるが、この五千字は十九元にしかならなかつた。これが芸術といつでも仲良くするという訳にはいかない原因かも知れぬ。）

これは長篇『二拳師』を圧縮した短篇『断魂槍』についての言である。『断魂槍』は三五年九月二十二日より天津『大公報』『文芸』副刊に連載された字数五千四百字の短篇である。ここから千字の稿料が三・五元ないし五元と考えられる。勿論、依頼ごとに稿料は異なるであろうが、おおむねこの線と考えて差支えない。因みに『駱駝祥子』の稿料は、

先決定一件事：由八月起，我供給『宇宙風』箇長篇，由八月一日起，每月月首您給我匯八十元；我給您一萬至

一萬二千字。¹⁵（先に決めておきたいのですが、八月から、『宇宙風』に長篇を出します。八月一日より毎月月初めに私の方へ八十元送って下さい。私は一万字から一万二千字をお渡しします。）

とある。三六年七月中旬、山東大学を辞した時に執筆を始め、全文二十四段、十五万七千字。同年九月十五日刊『宇宙風』第二十五期から連載が始まり、三七年十月一日刊第四十八期まで続いた。この文面から稿料はおよそ「千字七、八元」と思われる。

三五年九月 千字三・五〜五元

三六年九月 千字七〜八元

三七年八月 千字十元

このように各年の稿料が逡増していったものと考えられる。

自七七事変以後、十分之九的版税は停發給了、稿費由八元落至五元、甚至二元、一千字。¹⁶（七七事変以降、ほとんど印税は支払い停止となり、原稿料も千字八元から五元、はなはだしいのは二元に落ちた。）

抗日戦の戦乱による物価高騰の他方で、原稿料は下がるばかり、五元では作家として成り立たない訴えである。ここでも「千字八元」と言っており、日中戦直前の稿料と思われる。三〇年から三五年夏の稿料について、老舎自身の見当らない。夏衍の回想によると、

当時、翻訳原稿料はだいたい千字二元で、私は毎日二千字訳していたので、毎月百二十元にもなり、文芸界の貧しい友人達の中でいつしか「金持ち」になつていた。¹⁷

これは二八年から三四年まで続いたと述べている。この翻訳は開明書店の夏丐龔の依頼で、夏衍が二十八歳の無名の文学青年であったことからすれば、「幽默大師」と称された老舎の原稿料がこれ以下ということはあり得ない。老舎の三三年六月から三四年七月の作品は、

短篇小説 約十一万八千字

散文、雜文 約一万一千字以上（六篇含まず）

詩 三十八行、文二五〇字（二篇含まず）

老舎（斎藤）

であり、前述の「千字三・五〇五元」平均して四・二五元で換算すれば、小説・文で十三万字として、五百五十元以上（「千字五元」で六百五十元以上）。詩は少なくとも「韻文一行〇・二元」¹⁸と言っており、七・六元、詩序文が一・二五元の計約九元（以上）となる。更に長篇『離婚』の初版（三三年八月三〇日刊）三千部、約四百元を加えると、千元に近い稿料収入があり、少なく見積もっても月平均八十元以上の「作家」としての収入があったものと見てよい。これら作品の大部分は、夏、冬の休みを利用して書き上げたものである。

不當教授、我可以把所有的时间花在寫作方面去。（教授をやらなければ、すべての時間を創作に使える。）

教員を辞めれば年三十万字の稿料（千字五元で年千五百元、月百二十五元。千字八元で年二千四百元、月二百元）によって「職業作家」へ転身の可能性が現実的なものとなったのである。

三

大学教授の職を捨ててまで夢みた「職業作家」は、たとえ老舎の収入上の算段が実現したとしても、経済的には安定した高収入の教授には及ばないのである。彼が金銭について言及するとき、それは言わば「ものたどえ」のような部分もあり、諧謔めいたものもある。幼少時の家庭の貧困が彼に与えたものは、金銭への執着でも、貧しさへの嫌悪でもない。彼の人生哲学に刻まれたものは、社会の底辺で暮らす、貧しさゆえに悔りを受ける庶民への理解であり、これを代表する正義感であった。

三四年八月、上海の状況を見た老舎は、上海の友人の冒険しない方がよいという忠告に残念ながら従い、山東大学の招聘を受け再び教壇に戻らざるを得なくなる。老舎の決心を揺るがしたものについては後章にゆずるとして、辞した大学教員の職が当時、社会的にも経済的にも如何なるものであったのか、それにより老舎の上海行きに込められた意の程が垣間見れよう。

整理已講過的講義、預備下學期的新教材、這把「念讀寫作，四者缺一不可」的工夫已作足。此外、還要寫小説呢。教員兼寫家、或者寫家兼教員、無論怎樣排列吧、這是最時行的事。單幹哪一行也不够養家的。²⁰（講義し終え

た原稿を整理し、来学期の新教材を揃える。この「目を通したり読んだり、書いたり作ったりの四者欠くべからざる」作業に割く時間は充分すぎる程。その上、小説も書かねばならぬ。教員兼作家、作家兼教員、どちらにせよこれが今風。どちらか一方では家族は養えぬ。」

「どちらか一方では家族は養えぬ」と言うのは、自嘲めいた言い方である。当時の大学教授は月給が三百元であった。『魯迅日記』によると魯迅は二六年厦門大学教授で四百元、二七年中山大学教授で五百元、これは別格であろう。

茅盾と鄭振鐸が『文學』誌の創刊を企画した三三年、商務印書館の高級編輯であった傅東華に新雑誌の実務担当を依頼しようという事になったが、傅は月給が百元以上もあり、果してこれを承諾するか、と茅盾は回想している。同じく回想の中で、世界書局等の編集者達の月給が三、四〇元であったことも分かる。『記者生活三十年』の著者、陶菊隱は、三一年に『新聞報』駐漢口特派記者となり「高薪二百元（高給二百元）」と記している。

上海の「教授達は戦前、七、八十元の借家に住んでいたが、きわめてあたりまえであった」。背広が詭えて五、六十元、革靴一足七、八元、と鄭振鐸が書き残している。家賃について言えば、三二年四月、魯迅は施高塔路の新築の大陸新邨へ転居しているが、茅盾はこの家賃を「甚貴、毎月六十元（非常に高い、毎月六十元だ）」と言っている。丁玲は三一年十一月、馮達と上海善鐘路の里弄の二階に仮寓し、家賃が二十元、賄いが二十元であったと記している。三百元が如何程の金額かわかろう。

爲了一家の生活、我不敢獨斷獨行去掉了月間可靠的收入、可是我的心裏一時一刻也没忘掉嘗一嘗職業寫家的滋味。（一家の生活のため、私が独断で毎月の確実な収入を捨て去るわけにはいかない。けれど私の胸中の職業作家になりたいという気持ちは一時たりとも消えることがなかった。）

老舎が職業作家へと急ぐのは、他でもなく全ての精力を創作に注ぎたいという願望からであり、時局が大きくこれに影響していると考えられる。日本軍が突き付けた銃口を前に、国家と民族は存亡の危機に瀕し、その焦燥感が作品の処々に見える。とりわけ自尊心の欠如した民衆や官僚等は、老舎の筆下でその言動がさらけ出され、鋭い諷刺や諷刺以上に痛烈な「幽默」で処理される。活字の社会的波及力を彼は処女作「老張」以来よく知っていた。民

族の自尊心、個々の人格の尊厳を問ひ糾し、正義を喚起するという彼の課題は、その得意とする練られた構成と熟成された表現による長篇の世界においてより効果的に示される。老舎には熟考する時間が必要だった。

副次的な理由に過ぎないかも知れないが、齐鲁大学を去るにあたり、その後任の馬彦祥に、「校風がきわめて保守的で、教員等は己の保身のみを考え、他の事に関わりとうとしない。講義以外にこれといった活動も無く、大学全体に活気と学問の雰囲気が無い」という言葉を残している。

山東大学についてもここでふれておきたい。

山東大学は、一九〇一年、山東巡撫袁世凱の命により設置された「山東大学堂」に始まる。辛亥革命後、廃止され、省立の六つの実業専門学校に分割される。二二年、奉天系軍閥張宗昌によって再び統合され省立山東大学となったが、二八年、北伐軍によって閉鎖、のちに南京政府教育部によって省立大と私立青島大学（一九二四—二八）を合併し、三〇年、国立青島大学（楊振声校長）となり、三二年、国立山東大学（趙太侔校長）と改称された。

老舎が赴任した三四年は、『山東大學校史』²⁸によれば、文理学院（三二年に文・理統合）に文二系、理四系、他に工学院二系、農学院二部という学部構成であった。この年、八六四名が受験し一七六名が合格。中国文学系在籍生は六七名であった。中文系の専任教授十五名、講師八名、助教三名、主任は張怡蓀、同僚に游国恩、沈從文（講師、三四年十月辞職）、蕭涤非等がいた。聞一多は三三年一月に辞職、台静農は三六年八月に講師となっている。また、外国文学系に趙少候（弘文）がおり、三四年七月まで梁実秋が主任であった。

担当科目は、高級作文、小説作法、文芸批評、欧洲文学概論、文芸思潮で、週九から十二時間教えた。同『校史』によると老舎は当初講師でのちに教授となっている。教授の任期は通常一年であるが、山東大学は教育研究の連続性を保証するため、三年続きで招聘している。老舎の在職期間は、一九三四年九月から一九三六年十月とある。待遇は大学の規定では、教授三百〇五百元（実際は四百元が限度）、講師百五十元〇三百元、助教六十元〇百五十元、助理員四十元〇八十元、書記・助手二十五元〇五十元、となっている。

三四年十二月、着任三カ月にして前述の趙景深宛の手紙で、またも辞職願望を吐露した。果して二年後の三六年、老舎は校長の招聘を辞退した。蕭涤非の回想によれば、この年、省政府主席韓復榘が山東大に経済的に圧力をかけ、

学生運動を巧みに利用し、実力者であった趙太侔校長を辞任に追い込み、温厚な林済青（齊魯大学代理校長）を据えた。中文系のほとんどの教授は解任されたが、新校長は老舎に元同僚の誼から助力を再三依頼したが、彼は同意しなかったと言う。

三六年七月、山東大学辞職。

山東大学の二年間、長篇は一作も手掛けていない。この後の一年二カ月の「作家生活」によって、代表作と称される『駱駝祥子』や『文博士』、『我這一輩子』等が世に送られるのである。しかし、束の間の作家業も蘆溝橋の砲声に破られ、膠州湾に日軍軍艦旗が旗めいた。

三七年八月、上海への避難を考えたが、上海より「滬急勿來」の返電を受け、また、夫人の出産により身動きがとれなくなり、とりあえず単身済南へ向った。済南では齊魯大学に職を得、青島より夫人と二子を迎えるが、大学は授業が停止し、教員、学生も次々と離れていく有様であった。日本軍が済南に迫った十一月十五日、遂に老舎は一人、臨時首都漢口へ旅立つ。

從一九三〇年我就想作箇職業的寫家，經過抗戰，我想連「職業的」三箇字也取消，而乾脆就我更永遠作箇「寫家」，因爲「職業的」一詞含有掙錢喫飯之意，而我今天是身無長物，連妻小已都快餓死了。多咱我自己餓死，我就不能不放下筆；但是在餓死之前，我總算要不停的工作，因爲我要作一箇「寫家」。³⁰（一九三〇年から私は職業作家になりたいと思っていた。抗日戦により、「職業的」の三文字を取って、永遠に「作家」となった。「職業的」には稼いで暮らすの意があるが、今の私は素寒貧であり、妻や子にもひもじい思いをさせている。いつか私も飢え死ぬかも知れないが、それでも筆は放せない。その前まで仕事を止めることなく続けねばならぬ。私は「作家」なのだから。）

はからずも、抗戦が彼を「作家」にし、以後二度と教壇に戻ることはなかったのである。

四

月三百元の高給を捨て、「職業作家」への可能性を探るべく訪れた上海で、老舎は「物を書くだけでは食べていけない」という思いを強くし、不本意ながら大学へ戻らざるを得なかったのだが、それは月々二百元の収入を得る見通しが出版界の不況や政情の先行き不安により立たなかつたからであらうか。少なくとも出版界の「不景気」は、山東へ戻つてからの「作家」としての仕事振りを見る限り当たらない。三四年十月から三五年十月まで、

小説（十七篇）約十五万字
散文・雑文 約四万五千字³¹⁾

二十万字近くも書いている。掲載先も新たに増え、新しく創刊された『太白』、『宇宙風』、『水星』、『新文學』等も加わつた。『申報・自由談』等政府の言論統制で消えたものもあるが、「不景気」と果たして言えようか（確かに三三年末は経済的に「不景気」で上海の商店で倒産したものがかなりあつたことは事実である）。

在齊大辭職後、我跑到上海去、主要的目的是在看看有没有作職業寫家的可能。那時候、正是「一二八」以後、書業不景氣、文藝刊物很少、滬上的朋友告訴我不要冒險。³²⁾（齊大を辞めて上海へ行つた。主な目的は職業作家になる可能性があるか否かを見ることであつた。その頃は「一二八」の後で、出版界は「不景気」で文芸雑誌も少なく、上海の友人から冒険しないように言われた。）

「正是『一二八』以後」は、三二年一月の上海事変を指し、その後云々を言うのだが、時間的な齟齬がある。

この度の戦没は三カ月足らずであつたにも拘らず、上海の経済、文化、民生はどれも大きな被害を受けたし、全ての文芸刊行物がほとんど停刊となつた。³³⁾

と施蛰存は言っている。現代書局はこの機に大型文芸誌を計画した。それも従来のような発禁になつた左翼文芸誌（『拓荒者』、『大衆文藝』）や民族主義文学系誌（『前鋒』）のような政治色の強いものを排し、編集人に政治的無色の施蛰存を選び、三二年五月、『現代』を創刊した。周知のとうりこの雑誌は「同人誌でない普通の文芸

誌」を標榜したため、五四新文学運動以来の同人誌に慣れて来た文人たちの目に左でも右でもない雑誌と映り、「第三種人」の同人誌と決めつけられるに至る。逆に言えば「旗色」を鮮明にすることが求められていたのである。三二年九月には林語堂主編（のち陶亢德）の『論語』が創刊され、老舎は特約撰稿者となった。また、日本軍の砲撃で焼失した商務印書館も王雲五の尽力で、同年秋から使用する教科書の印刷体制を確保し、八月一日には復興宣言を出し、『東方雜誌』等四種類の刊行物も十月には復刊している。上海事変による影響は夏までには概ね平息に向かったと見てよい。

自從滬戰以後、刊物增多、各處找我寫文章。³⁴（上海戰役後、雑誌が増え、あちこちから文章を書くようにたのまれた。）

と言い、また、

趕到「一二八」以後、我纔覺得非寫短篇不可了、因爲新起的刊物多了、大家都要稿子、短篇自然方便一些。³⁵（「一二八」の後、短篇を書かざるを得なくなった。新たに雑誌が増え、皆原稿をほしがったので、短篇が都合が良かったからだ。）

更に、

『大明湖』火葬以後、滬上文藝刊物索稿者漸多。³⁶（『大明湖』が焼かれてしまった後、上海の文芸誌で原稿を求めて来るのが多くなった。）

と述べており、「書業不景氣、文藝刊物很少」は釈然としない。確かに三三年十一月から三四年前半まで、国民党上海市党部の言論統制、出版物の検閲強化により、書店や左翼作家の経営や活動に一時支障があったが、書店業界は検閲にふれた部分を削除して出版、販売する方策をとり、作家のうち当局から睨まれた者は筆名を様々に変えて対応したこともあり、この風波も程なく収まった。茅盾は三四年が雑誌発禁措施に抗して新刊誌が続々と生まれ、「雑誌の年」と呼ばれたと述べている。³⁷

山東に戻った後、老舎は相変らず『文學』、『現代』、『論語』、『人間世』等の原稿依頼に応じ、三五年になると創刊された各種雑誌からの求めもこなしているのである。

老舎（斎藤）

ところで老舎は十数日に及ぶ上海滞在で作家、編集者に比較的幅広く会っている。北四川路の良友図書印刷公司を訪れ、趙家璧、鄭伯奇（『電影畫報』編集者）、馬国亮（『良友畫報』編集者）と初めて会い、その場で『良友畫報』の作品依頼を快諾した。「良友叢書」へも『離婚』に続く二作目の書き下しを求められた。これは結局実現しなかった。³⁸

旧知の鄭振鐸とも会い、同宅で茅盾と面識を得、鄭の主筆で茅盾、巴金、黎烈文、徐調孚、葉聖陶等「左翼作家」の面々と会食した。別に、林語堂、邵洵美、沈有乾、簡又文等雑誌『論語』に集まる作家とも卓を囲んでいる。³⁹魯迅とは連絡が上手く行かず、面会を果たせなかった。『魯迅先生逝世二週年紀念』（三八年十月講演）の中で、この事を残念がっている。

趙家璧とは良友倒産後、晨光出版公司を共に設立した仲である。だが、趙の回想には老舎が「職業作家」を断念した件についての記述は見当らない。

雖然家在北平，可是已有十六七年没在北平住過一季以上了。因此，對於北平的文藝界的朋友就多不相識。不喜上海，当然不常去，去了也馬上就走開，所以對上海的文藝工作者認識的也很少。⁴⁰（実家は北平とは言え、もう十六、七年も北平にひと季節以上住んだことが無いので、北平の文芸界の人々も多くは面識がない。上海は好きではなく、当然しょっちゅうは行かないし、行つてもすぐ帰るから、上海の文芸活動家で知る者も少ない。）

彼が文芸界の論争に自ら関わりとうしなかった事は事実である。この国の病態を痛烈に諷刺した『猫城記』（三二年八月から三三年四月、『現代』に連載）には強い主張があったが、それゆえに不評を買った。老舎はこの作品で失なつた「名譽」を回復すべく『幽默』に戻り、『離婚』を書いた。「時局がこんなであるのに、『幽默』でなければならぬ」というのは、心と裏腹であり、涙をのんで笑わねばならぬ⁴¹と『離婚』執筆中にもらしている。文芸界の論争よりも中国と中国人の命運により重きを置いた彼が、「愛国作家」と呼ばれる所以がここにある。「革命文学」運動が三〇年に左聯に収約されて後、左聯は党の下部組織化傾向を強め、「反動的」民族主義文学、「第三种人」、「自由人」、林語堂等と論戦を繰り広げた時、老舎のような、こうした議論に馴染まない作家に立錐の余地が果してあつただろうか。ましてや「職業作家」として、いずれの派にも属さず活動して行く場が残されていただ

ろうか。

山東大学では、同僚の王統照から上海文芸界の複雑な情況や人事をめぐる確執、各派間の争いを度々聞いたが、老舎は笑って意に介さなかったと言う。²²しかし、全国的な抗戦が始まると俄然、彼の態度は一転した。

平滬兩大文藝本營的工作者、認識我的很少。抗戦後、有了見面的機會、我交了朋友。(中略)我羞見人；文人中自然也有不少生人、可是我²³不怕見他們、且願交爲朋友、因爲既是文人、自有相近之外、人雖生、而氣味久已相投。(北平、上海の文芸活動家で私を知る者は少なかった。抗戦が始まって後、彼等と会う機会が出来て親しくなった。〈中略〉私は人に会うのが恥しいたちで、文士達の中で知らぬ者も少なくなかった。けれど彼等に会うのが嫌ではなくなつたし、むしろ親しくなりたいたいと思つた。同じ文士なのだから自と似た所があるし、慣れば馬も合つてくる。)

彼を変えたもの言うまでもなく、全民族一致して救国にあたる抗日の大義である。如し老舎という人物が無かつたとしたら、作家達の団結が保たれなかつたであろう。それは、老舎の抗日戦時期の活動振りに示されている。

老舎の三四年八月の上海行とそれをめぐる記述や文辞は、出版界の不況が問題だつたのではなく、上海文芸界の情況を嫌つたものと解すべきであろう。左右中間各派の論争もさることながら、抗日の言論までも封じようとする空氣を嫌つたと言える。この時点で「職業作家」となつても経済的には必ずしも困窮する訳ではなかつたし、作家になることの代償としては輕微であつた。

各派が論争を繰り返す時ではなく、国民党政府がこれを取締ることに腐心する時でもないと考えたに違いない。「物を書くだけでは……」の言葉に、物を書くだけでは済まされない危機的狀況が迫っている、それにどう対するかという老舎の心情が読み取れるのである。

弱体化した清朝が八カ国聯合軍の侮りを受けた時、義和団は列強軍隊に抗しよく戦つたが、最後、清朝は列強に屈服してしまつた。この歴史が老舎の胸中に深く刻まれていたからこそ、二度と「国破家亡」を味わいたくないと考へたはずだ。日本軍の前に中国が崩壊する様を人々の失敗、敗北で暗示的に表現した彼の短篇『哀啓』が『文學』誌に掲載されたのは、三六年十月のことである。

老舎(齋藤)

注

- (1) 老舍「還想着她」一九三四年十月『大衆畫報』第十二期。
- (2) 胡金銓「老舍和他的創作」一九七四年一月『明報』第九卷一期。
- (3) 山東大學校史編寫組『山東大學校史』一九八六年四月、山東大學出版社、四一頁。
- (4) 前掲注(2)。
- (5) 老舍「述志」一九四二年十二月『宇宙風』第一二九期。
- (6) 老舍「『櫻海集』序」一九三五年八月、人間書屋。
- (7) 老舍「一九三四年計劃」。
- (8) 趙景深「我所認識的老舍」一九八〇年一月『藝術世界』第一期、老舍からの書簡による。
- (9) 王惠雲、蘇慶昌『老舍評傳』一九八五年十月、花山文藝出版社、一二七頁。
- (10) 老舍「『火葬』序」一九四四年五月、晨光出版公司。
- (11) 老舍「三年寫作自述」一九四一年一月『抗戰文藝』第七卷一期。
- (12) 趙家壁『文壇故旧錄』一九九一年六月、三聯書店、三〇四頁。
- (13) 老舍「怎樣維持寫家們的生活」一九四〇年二月二十四日『星洲時報』(新加坡)「星晨副刊」、「老舍文集」十五卷、四〇二頁。
- (14) 老舍「我怎樣寫短篇小說」一九三六年一月『宇宙風』第八期。
- (15) 「一九三二年八月 致陶亢德」書簡、舒濟編『老舍書信集』一九九二年六月、百花文藝出版社、四四頁。
- (16) 前掲注(13)、四〇〇頁。
- (17) 夏衍『懶尋旧夢錄』一九八五年七月、三聯書店、一三〇頁。
- (18) 前掲注(13)。

- (19) 前掲注(2)、『明報』第九卷六期。
- (20) 老舍「夏之一週問」一九三一年九月『現代』第一卷五期。
- (21) 徐鑄成『報海旧聞』一九八一年二月、上海人民出版社、五六頁。
- (22) 茅盾『我走過的道路』(中)一九八四年五月、人民文學出版社、一九四頁。
- (23) 鄭振鐸「論大學教授待遇問題」一九四六年四月『週報』三十四期。
- (24) 前掲注(22)、一八二頁。
- (25) 丁玲『魍魎世界』一九八七年七月、湖南人民出版社、一〇頁。
- (26) 老舍「我怎樣寫『駱駝祥子』」一九四五年『青年知識』第一卷二期。
- (27) 馬彥祥「馬彥祥談老舍」一九八四年四月『劇壇』、舒濟編『老舍和朋友們』一九九一年十月、三聯書店に収む。
- (28) 前掲注(3)。
- (29) 蕭滌非「聊城鉄公鷄」一九八五年三月『中国烹飪』、『老舍和朋友們』に収む。
- (30) 前掲注(5)。
- (31) 未見の雜文、散文八篇、詩三篇を含まず。
- (32) 前掲注(26)。
- (33) 施蟄存「重印全份『現代』引言」一九八四年九月、上海書店影印版『現代』。
- (34) 老舍「『趕集』序」一九三四年九月、良友圖書印刷公司。
- (35) 前掲注(14)。
- (36) 老舍「習作二十年」一九四四年四月『抗戰文藝』第九卷三・四期合刊。
- (37) 前掲注(22)、一三五頁。
- (38) 老舍「歇夏」一九三五年七月『良友畫報』第一〇七期。三四年冬、五、六千字を書いたが、翌春、ある雜誌で似通った内容の小説を見つけ、執筆をやめ、そのままとなったという。

老舍(斎藤)

- (39) 老舍「懷友」一九三九年四月『抗戰文藝』第四卷一期。
- (40) (39)に同じ。
- (41) 「一九三三年二月六月 致趙家璧」書簡、前掲『老舍書信集』に収む。
- (42) 王統照「遙憶老舍與聞一多」(節録)、前掲『老舍和朋友們』に収む。
- (43) 老舍「自述」一九四一年七月七日『大公報』「戰線」第七九一号。